支援する宗教者

# 東日本大震災と仏教
## ——2011・3・11に直面した仏教者の対応と展望

蓑輪顕量（みのわ　けんりょう）

### はじめに

三月一一日以降の仏教者とそれ以前の仏教者に相違があるわけではない。しかし何かが変わったようにも思う。それは何であろうか。そもそも仏教者とは何か。一言で述べるのは難しいが、仏教者とは仏教に関わり仏教に信をおいている人とでも定義しておこう。とにかく、研究者や僧侶という立場の相違を問わず、仏教に信をおいている人たちのことを、一括りに仏教者と呼ぶことにしたい。

その仏教者として災害に対しどのようなことができたのであろうか、また出来るのであろうか、さらにはもっと積極的に、何をしなければならないのであろうか。このような問いが可能になり、それを真剣に問われるようになったのが、二〇一一年三月一一日以降であるように思う。仏教は学問のように捉えられる伝統が一方に存在することは否定できないが、宗教として現実の社会に密接に関わるものであることもまた真実である。このような視点に立って、本論では災害に対して仏教者が過去にどのように向き合ってきたのか、また何ができるのかを考えてみたい。

### 一

仏教者が災害に対してどのような発言をしてきたのか、過去にその先例を探ってみれば、中世の時代が一つの典型となろう。たとえば叡尊（一二〇一—一二九〇）や日蓮（一二二二—一二八二）が、その生涯のなかで幾多の災害に遭遇し、様々なことを述べている。

まず叡尊から述べよう。叡尊は奈良の地に活躍した律宗の僧侶であるが、その言行録として『興正菩薩御教誡聴聞集』なる資料が存在する。この資料は叡尊の日常の教導を物語る貴重な資料であり、当時、どのようなことを実際に語っていたのかを知らせてくれる貴重な資料である。そこに次のような言及が存在する。「自斎祈雨の事」と題された旱に関わる在家信者への説法の記録であるが、そこには天竜と人間の行為との関係が述べられている。

凡干魃の事は聖教に申たるは、天人の修羅と中悪くして常に戦う。修羅は天の威を損ぜんとたくむ。人間に「造悪墜悪道、修善生天上」。故に人に悪を造せて天に生ぜしめじと計う。旱ほど人の悪を造る事無き故に、修羅と悪龍と共に雨を下さず。善龍と天とは人間に甘雨を下て、人をして天に至らしめんと欲す。爰を以て各、戒を持ち宝号を唱え給わば、善龍と天人と力を得て、自ずから雨を下すべし。（中略）然れどもこの旱は僧の過に非ず、国土に悪を造が故に衆生の業報なり。」（『鎌倉旧仏教』日本思想大系、岩波書店、一九七一年、一九七頁、読みやすくするため原文のカタカナ表記をひらがなに変え、一部書き下したところがある。）

雨は龍が降らすものであり、修羅と悪龍が共同して雨を降らさない、しかし人間が戒を保ち宝号を唱えれば、善龍と天人とは力を得て雨を降らせることができるのだ、という素朴な関係を説いている。ここから叡尊は旱を人間の増悪のゆえに生じるもの、すなわち人間の悪業の果報であると捉えていることがわかり、降雨という自然現象と人間の行為との間に、間接の関係性があると考えていたことが分かる。なお、残念ながら地震に関わる直接の言及は、畿内に活躍したことが多かったせいか、管見の範囲では見いだすことができなかった。

日蓮の生涯においても災害は大きな意味を持った。たとえば正嘉元年（一二五七）八月二三日の大地震は、日蓮の主著の一つになる『立正安国論』執筆の動機となった。本書は、なぜ大地震が起こり、大災害がもたらされるのか、その原因に対する探求を行ったものである。そしてその原因は、為政者の誤った信仰が原因であると述べたものである。日蓮には自然現象と人間との関わりを述べる文章が時折散見される。たとえば日蓮遺文の『守護国家論』には次のような記述がある。

国に三災起こらば悪法流布する故なりと知るべし。而るに当世は随分国土の安穏を祈ると雖も、去る正嘉元年大地大に動じ、同二年に大雨大風苗実を失へり。定めて国を喪ぼすの悪法此の国に有る歟と勘うる也。（立正大学日蓮教学研究所編纂・昭和定本『日蓮聖人遺文全集』、一一六頁、以下、昭和定本と略する。）

悪法がこの世界にはびこるが故に天地の三災（小の三災は戦争、疾病、飢饉、大の三災は火災、水災、風災）が起こるというのである。叡尊にしても日蓮にしても、この言及の背景には、仏教が伝えた印度的な価値観が存在する。[1]

このような言及と関係するのであろう、東日本大震災後、当時の石原都知事の発言に端を発し、末木文美士氏の発言などを交え、一時期、注目を集めたものが、地震やその災害は私たちの行為のもたらしたものであるとの位置づけであった。これは、人間の行為が必ず果報を招くと考えるところから始まる。そして、その果報の一つが天地の災害、すなわち地震であったというものであった。

これには多くの反発が生まれ、平成二四年六月三〇日～七月一日にかけて開催された日本印度学仏教学会の第63回学術大会（鶴見大学にて開催）では、震災に関するパネルが設けられた。末木文美士、師茂樹、北条勝貴、佐藤哲朗らがパネリスト、石井公成がコメンテーターであったが、それぞれが独自の視点から意見を述べている。[2] なお、末木氏にはこれらの一連の発言に基づく社会の反応を含めながら、仏教と現代の問題を正面から扱った『現代仏教論』を出版しており、[3] 振り返って読むには好箇の資料となっている。勿論、末木氏も、私たちの行為が自然災害を起こした直接原因であるとは述べていないが、私たちが自らの欲望を解放し、自己の欲望の充足のみを追い求めてきたところに、今回の災害を大きくしたものがあったのではないかと述べている。この意見には、十分耳を傾けるべきものがあると思う。なお日蓮宗現代宗教研究所が、平成二三年二月に正面からこの問題を扱って研究会を開催している。[4]

さて、近世の時代にも災害に直面して、その有り様を述べた仏教者として良寛を挙げることができる。彼は文政一一年一一月一二日の上越地方を襲った「三条の大震」に遭遇し、禅者として手紙に次のような言葉を書いて親戚に送っている。

災難に遭う時節には災難に遭うがよく候。死ぬる時節には死ぬがよく候。これはこれ災難を逃れる妙法にて候。[5]

ここに示された災害への対処法は、まさしく禅者らしく、現在に起きているものを真正面から受け止めることから可能となることを示している。これは止観のもっとも基本的な性質である「心を一つの対象に向けること（心一境性）」を端的に語ったものであると推測される。真正面から受け止めること、逆説的に聞こえるかも知れないが、それこそが災難を逃れる妙法であると述べているのである。すなわち何事もまず受け止めることから始まるというのである。

さて、二〇一一年三月一一日に起きた東日本大地震およびそれによって引き起こされた大災害を振り返りながら、仏教者は、いかなる対応を取ることができたのか、また今後、あり得べき対応とは如何なるものであるのかを、次に考えてみたい。

## 二　仏教者の対応

そもそも仏教者だからというのではなく、震災後、実際に起きたことを考えてみれば、そこには人間に普遍の感情がまず働いたということができるように思う。それ